

学僧 稲垣眞我とイギリス留学

— 佛敎大学附属図書館デジタル資料『浄土教報』を中心に —

齊藤 利彦

〔抄録〕

文学者や研究者の留学体験・渡欧体験を考察することは学史研究上、学説の誕生やその後の研究活動の展開を考える際、意味深い。

研究者がどこに留学したのか、なぜ、その地を選んだのか、留学先で、何を見聞し、何を得て、どのような人々と交流したのか、それらが帰国後の研究に何をもたらしたのか、を明らかにすることは、上記の点を検証するためにも重要であろう^①。

近代浄土宗では宗命により、優秀な人材に海外留学させ、その成果をもって、宗門の発展に寄与させようとした。いわゆる浄土宗海外留学生（制度）である。彼らの海外での研究先や研究活動を探求することは、近代浄土宗僧の学知修得を考察するうえでも意義あることであろう。

本稿は、本学有縁の浄土学僧や研究者の留学について、『浄土教報』掲載記事を中心に検討することを目的とするが、その際、本学第三代学長稲垣眞我のイギリス留学を核に考察していく。

稲垣がイギリスで、あるいは巡遊したヨーロッパで、何を見、何を感じ、誰と交流し、それらを通して何を得たのか。その渡欧体験を通し、近代浄土宗学僧の学知修得とその背景、影響などを考えてみたい。同時に、稲垣の留学を検討することは、大学史としての有意義であろうと考える。

キーワード 稲垣眞我 浄土宗海外留学生 渡欧体験
オックスフォード大学 ラスキーン・カレッジ

はじめに

大正三年(一九一四)一月二五日、漱石夏目金之助(以下、夏目漱石とする)は、学習院大学輔仁会で「私の個人主義」(『文学論』所収)と題し講演する。その後半、漱石は、

かくて私が啓発された時は、もう留学してから、一年以上経過していたのです。それでとても外国では私の事業を仕上げるわけに行かない、とにかく出来るだけ材料を纏めて、本国へ立ち帰った後立派に始末を付けようという気になりました。すなわち外国へ行った時よりも帰って来たときの方が、偶然ながらある力を得た事になるのです。

と、留学による渡欧体験が、帰国後の自身に、何かしらの影響を与えたとに相違ない、と述べている。

漱石は明治三三年(一九〇〇)九月八日、第一回文部省給費留学生として、一路、イギリスにむかい、一〇月二八日、イギリスはロンドンに到着した。約二年半に及ぶイギリス留学の始まりである。

留学先における漱石の事績や考えなどは、渡欧日記や渡英日記、各種の書簡などによって詳しくわかり、漱石研究の上でも重要な視点とされているが、留学中、彼は「これ以上勉強しようのない、勉強の生活¹⁾を」し、それがゆえに神経衰弱になるなど、漱石自身が指摘するよ¹⁾うに、留学の二年間は苦々しいものであった。

とはいえ、漱石自身、自身の留学がその後の人生にもたらした力について述べているように、漱石文学の成立と背景、その後の展開に、この留学が果たした役割は大きい。

岡村民夫は、柳田國男の渡欧体験を検討するなかで、「長期にわたる外国生活の体験」は「本人にも把握しかねるくらい多くの互いに異質な襞をもった多様体であり、その襞は、帰国後長い時間をかけて徐々に展開し影響力を顕す²⁾」ものだと指摘しているが、まさしく、漱石の留学という渡欧体験も、そのとおりであったのであろう。

このように、文学者や研究者の留学体験・渡欧体験を考察することは学史研究をすすめる、学説の誕生やその後の研究活動の展開を考えるうえで意味深い。研究者がどこに留学したのか、なぜ、その地を選んだのか、留学先で、何を見聞し、何を得て、どのような人々と交流したのか、それらが帰国後の研究に何をもたらしたのか、を明らかにすることは、上記の点を検証するためにも重要であろう³⁾。

ところで、近代浄土宗では宗命をもって、優秀な人材に海外留学させ、その成果をもって、宗門の発展に寄与させようとした。いわゆる浄土宗海外留学生(制度)である。

明治三三年(一九三〇)四月、第一回浄土宗海外留学生として、荻原雲来と渡邊海旭はインド仏敎研究のためドイツに留学、カイザーウィルヘルム二世大学(ストラスブルグ大学)で梵語や仏敎学を学んだ。とりわけ、エルンスト・ロイマンのもとで研鑽を積むべく波濤をこえ、以後、一〇年にわたって研学にいそしむのである⁴⁾。

以後、数多くの学僧らが宗命、あるいは私費で留学する。一例をし

めすと、稲垣眞我（イギリス・オックスフォード大学）、佐藤学順（アメリカ・南カルフォルニア大学）、イギリス・セリオープ大学）、高島寛我（フランス・ソルボンヌ大学）、友松圓諦（ドイツ・ハイデルベルグ大学）、フランス・ソルボンヌ大学）、中島眞孝（アメリカ・コロンビア大学）、眞野正順（イギリス・オックスフォード大学）、ドイツ・ベルリン大学）、矢吹慶輝（アメリカ・ハーバード大学）、イギリス・オックスフォード大学）ら、諸氏である。⁵⁾

このように、近代浄土宗では、宗内の俊英を海外へ留学させ、その成果をもって、宗門の興隆を図らんとした。

ところで、渡邊海旭が主筆をつとめた『浄土教報』には、浄土僧を中心に、浄土宗関係者の留学記事が散見する。実例として、本学第二代学長の高島寛我を取り上げたい。大正一五年（一九二六）六月、フランスに留学、パリにあるソルボンヌ大学で仏教学、梵語学を研究した。昭和三年の年末より、スリランカ・インドの仏蹟を参拝し、昭和四年（一九二九）一月に帰朝した。

『浄土教報』昭和四年二月三〇日には、留学を終えて帰国する高島に關する記事が掲載されている。

高島寛我氏近く帰朝

佛専教授高島寛我氏が欧州留学の旗を終り来る二十八日伏見丸にて神戸に帰朝の予定なので香雨会では二月二日歓迎会を開くがこの外にも佛専専門学校有志主催及び京都教区有志主催の歓迎会等種々の準備が進められてゐる。

また、同年六月三〇日付記事では、

欧州に於ける佛教学研究

科外 高島寛我氏

欧州殊に仏蘭西に於ける過去及現在の佛教学研究が如何に行はれつゝあるかに就て、十九世紀の始め頃より仏蘭西高等学院の教授達によりて其の研究が始められ、其の特色としては欧州各国の小乗研究より脱して最初より大乘教の研究に手を付けられた事、更に現代に至るまで各年代順に研究者及其の著書等を詳しく説明し、大いに師留学中の研究を発表せられ会員をして海外の佛教学研究の状態を容易にうなづかしめた。

と、留学成果の一端をしめす発表をおこなったことを伝えている。

このように、『浄土教報』には、留学以前・留学中・帰国後の成果などを伝える記事が掲載されており、これらの記事をもとに、近代浄土宗学僧の海外留学とその動向に關して素描することが可能である。近代の人文科学系研究者の留学は不明な点が多いなかで、『浄土教報』は近代浄土宗の動向などを伝えるだけでなく、宗内の学僧や仏教学をはじめとする研究者とその留学について考察できる史料である。

そこで本稿では、本学有縁の浄土学僧や研究者の留学について、『浄土教報』掲載記事を中心に検討してみたいが、その際、本学第三代学長稲垣眞我的イギリス留学を核に考察する。

稲垣のイギリス留学は満三四歳のおりの海外留学であり、「若くして大志」を抱き、「長年の夢」であったヨーロッパ留学を実現した。その

背景には、留学成果をもつて「青年宗教家」輩出と育成を志したからである。⁽⁶⁾

稲垣眞我がイギリスで、あるいは巡遊したヨーロッパで、何を見、何を感じ、誰と交流し、それらを通して何を得たのか。その渡欧体験を通して、近代浄土宗学僧の学知の修得とその背景、影響などを考えてみたい。同時に、稲垣の留学を検討することは、大学史としての有意義であろうと考える。

なお、すでに本文中、敬称は省略しているが、以下の本論も、敬称などは略すこととする。

I 稲垣眞我とその事績

1 稲垣眞我の生涯

稲垣は佛教大学史をはじめ、東海学園史のうえからも看過できない学僧であり、教育者である。

その生涯については『稲垣眞我先生遺文・追悼文集』に詳細な年譜や追悼文が掲載されているが、⁽⁷⁾稲垣眞美は「わが父・稲垣眞我のこと」において、子息の眼をとおした稲垣の人と学問を語っている。眞野龍海も稲垣の生涯と活動などについて言及しており、⁽⁸⁾すでにいくつか論考がある。そのため、ここで、稲垣の生涯や活動をまとめることは屋台屋に架するきらいもあるが、論を進める前提として、その略歴を記しておきたい。

稲垣眞我は、明治二〇年（一八八七）、愛知県中島郡（現・稲沢市）

に、稲垣善七、れいの子として生まれた。幼名は孫十郎。明治二十七年（一八九四）に眞言宗で得度するが、浄土宗に転じ、同三五年、京都招善寺の秦隆典のもとで改めて得度、眞我と改名した。同四五年、宗教大学研究科を卒業。北海道布教師として函館称名寺に駐在、その後、朝鮮開教使として従事、その名を轟かせた。⁽⁹⁾

大正一〇年（一九二二）九月、イギリスはオックスフォード大学に留学、宗教学、仏教学、社会事業を研究し、それと並行してヨーロッパ各地を見聞し、同二年（一九二三）、アメリカ経由で帰国する。

大正一三年（一九二四）、佛教専門学校教授に就任、昭和一六年（一九四二）には東海中学校校長となり、東海学園中学校、高等学校校長を歴任したのち、同二四年（一九四九）、佛教大学教授に復帰、同三年（一九五六）から三か年、佛教大学第三代学長をつとめ、新制大学としてスタートした本学の基礎を固め、留学希望理由であった青年宗教家、あるいは青年たちの育成に尽力した。

同三八年（一九六三）、浄土宗ハワイ開教区、開教総監に就き、同四一年（一九六七）、宗門功労者表彰、勲三等瑞宝章を受章している。⁽¹⁰⁾ つぎに、佛教大学長としての稲垣の事績をまとめてみたい。

2 佛教大学と稲垣眞我

稲垣が学長をつとめた昭和三十一年から同三六年（一九六一）の佛教大学は、新制大学に昇格し、ハード面・ソフト面ともに整備が進んだ時期であり、苦境の単科大学時代を抜け出し、近代化が図られたが、それらをリードしたのが稲垣であった。⁽¹¹⁾

おおまかにその業績をまとめると、体育館新築・校舎修築・仏教学専攻科設置にともなう各種学則の改正・新制大学昇格十周年記念事業と仏教公開講座開設などである。以下、その内実を略記する。

① 体育館新築と本館校舎修復

佛教専門学校から佛敎大学への昇格条件となっていた体育館新築は、高島寛我第二代学長時代からの懸案事項で、計画が立案され進められていた。しかし、諸条件が整わず、この時期まで実現していなかった。

昭和三十一年八月、〈体育館建築委員会〉が発足、学長稲垣、後援会長石橋誠道、後援会支部代表田尻龍道、教育資団評議員代表鶴飼光順、父兄会代表石原恩純、同窓会代表秦隆真・石川良宣らが委員となり、建築事業を促進する。とくに、稲垣が先頭に立って募金につとめた。同年末に工事は開始され、翌年六月竣工、同月二一日、新築体育館において落成祝賀会が開催されている。

同三五年（一九六〇）、法然上人七百五十年御遠忌を記念し、本館校舎が修築され、学長室、廊下、外壁などをリニューアルした。一〇月二三日には、法然上人七百五十年御遠忌及び校舎修築記念式典を挙行、稲垣をはじめ三枝樹正道、恵谷隆戒ら、勤統二〇年以上の教員が表彰されている。

② 学則の変更

稲垣が学長の時代、大きな学則変更がなされた。ひとつは、仏教学

専攻科仏教学専攻課程の設置にともなう学則改正である。設置目的は、一般大学卒業生が浄土宗教師資格を取得できるようにするためであった。同三一年一月、必要な申請を文部省に提出し、翌年（一九五七）三月二三日、同省より許可される。これに並行して、同三二年四月より学費値上げのために学則改正が行われたほか、同三四年四月、研究室整備費や教職員待遇費改善などの一部学則改正も実施した。

③ 新制大学昇格十周年記念事業

新制大学昇格十年を記念して、一般社会と本学との関係強化の観点から、「仏教の街頭への新出」¹²⁾を目的とし、仏教公開講座が開設される。市内の智慧光院を会場として、年内に二四回もの講座・講演が企画・実施され、好評理に終了した。

『佛敎大学研究紀要』第三五号は「十周年記念特輯号」を組むが、稲垣は巻頭論文として、「佛敎と自殺の問題」を寄せている。¹³⁾

記念式典そのものも、記念講演を含み盛大になされたが、式典にともない図書館所蔵文献の充実、同窓会名簿の作成などの事業も展開した。

稲垣は学長として、こういった学内行政、記念式典を牽引し大きな功績を残した。昭和三十六年（一九六一）三月三一日、学長の任期を終えたが、大学は長年にわたる尽力と功績に対し、それを讃えるため、本学名誉教授（第一号）の称号授与をもって応えた。

Ⅱ 稲垣眞我とイギリス留学

1 稲垣と留学準備

稲垣が海外留学を志したのはいつのことか。この点に関しては、稲垣眞美氏の言及どおり、すでに、朝鮮布敎で名をなしていた三四歳のことで、朝鮮布敎中、修学修行への渴望が高まり、志しある信者を発見・養成したい、信頼されるような若き宗敎家を育成したい、そのためにも留学をし、現今の社会に関する視野を広げたい、そういう考えからであった。

同年七月頃には、

◎稲垣眞我氏 釜山に活動の同氏は欧米宗国漫遊の計画熟し既に信徒の承諾を得て遠からず出発と決定し目下準備中といふ。⁽¹⁴⁾

と、欧州留学を計画し、留学準備にはいつて信徒の承諾を得た、という。ここでいう信徒とは、釜山知恩寺の信徒を指すものと考ええる。

大正一〇年（一九二一）八月二日付『浄土敎報』に、

稲垣眞我氏の壯遊決す 朝鮮開敎区に於て盛名ある稲垣眞我氏は今回某有力者の援助に依り、欧米敎況視察のため壯遊することに決し、矢吹渡邊其他先輩の意見を問ふが為に八月に入り上京し多分十一月頃発程すべく旅行期間は大約一年乃至二年といふ慶すべき至りなり。

といった記事があり、八月に矢吹慶輝、渡邊旭海両氏の意見をうかがうために上京。同時に、留学することを明確にし、十一月頃に出発、留学期間は一年ないし二年と決している。

その後、

◎稲垣眞我氏 同氏の欧米視察は愈々十一月頃出発に決定し去る七日上京、各方面の先輩識者と往訪し之が準備に努めつ、あり。⁽¹⁵⁾

と、九月七日に上京して、留学準備に努めるが、一〇月にも上京して先輩諸氏から意見を求め、慎重に、諸準備をすすめている。

稲垣は、留学を決意してから一か月ごとに上京し、諸先輩に相談や意見を求め、かつ諸準備を進めていったが、同年一月八日、神戸港より吉野丸にて出帆、一路、イギリスへとむかう。神戸出帆前には、芦屋に住む福永政治郎宅を訪れ、留学行きを話している。⁽¹⁶⁾

福永政治郎とは金巾貿易で成功した実業家で、高瀬商店総支配人を務め、釜山実践商業学校も設立した人物であり、同時に、釜山知恩寺檀家総代も務めた。

稲垣は富田儀作の知遇を得て、同寺住職を引き受けていたが、朝鮮布敎中、福永より百万円を拠出するので社会事業を行うよう要請され、京城の財団法人和光敎団の設立、財団法人釜山共生園の設立などに結実させた。⁽¹⁷⁾

この社会事業を展開するなかで、ヨーロッパ留学という「別の世界に思いを馳せて」いたのである。⁽¹⁸⁾

2 イギリス到着までの道程

大正一〇年十一月、稲垣は神戸を発ち、海路にてイギリスへとむかった。都合二年間の留学のなか、宗教学・仏教学・社会事業に関する研究を行なうと同時に、周辺国の視察も精神的に行なうなどし、長年の夢であったヨーロッパ留学の実をあげている。

稲垣の略年譜などをみると、英国留学は上述したとおりだが、帰路はイタリア・フランス・スイス・ドイツを経てアメリカに渡り帰国した、とある。

『稲垣真我先生遺文・追悼集』所収の「稲垣真我先生略年譜」に、

大正九年（一九二〇）十一月より大正十二年（一九二三）一二月までの満二年、浄土宗より外国留学を命ぜられる。

英国オックスフォード大学において、宗教学・社会事業を研究する。

* 往路は、中国、シンガポール、マレーシア、セイロン（現スリランカ）、エジプト（スエズ、ポートサイト）、マルセーユ、ロンドン。帰路には、フランス、イタリア、スイス、ドイツ、アメリカの視察も兼ねた。¹⁹⁾

とあって、のちに詳述する稲垣執筆の小説「不請の友」に「巡遊しましたとも、佛、伊、端、独、白、和から亜米利加廻りで帰国しました」²⁰⁾とあることから、この点をうかがえる。

しかし、『浄土教報』の書信などの記事を見ると、若干異同があるの

で、同紙などを中心に素描・復原してみたい。

同日、神戸港を出発した吉野丸は門司に寄り、同地に二泊した後、一三日正午、上海に到着した。そのおりの様子を、稲垣は、つぎのように伝えている。

▲上海より 稲垣真我

渡邊先生足下、渡欧の途次此処より日本郵便最後の敬意を相表し申候便乗船吉野丸出帆延期のため八日午前漸く神戸を出発門司二泊の上本十三日正午当地に上陸仕東洋第一の自由港の規模宏大を見蛙井の歎を發し申候同時に二時間を費し雨中を市内見物仕道路悉くアスハルト、線路なくして行く電車、大建築を見東京の銀座や丸之内等は小指にも叶わぬ有様にドギモをぬかれ申候、邦人経営の豊陽館に夕食を喫し知人を東本願寺に訪れ別院に一夜を談笑仕候。

明十四日午前十時香港へ向け出帆可仕候吉野丸は元独逸船クライスト号にて同乗者金澤医専山田博士外文部留学生十名有之皆独逸中心の旅行者森戸法学士の夫人も露西亜声楽家等と共に時々話題に上り居り候、船にならされたる小生は何不自由なく愉快なる航海を続け居り候間幸御安神被遊度候

（一月十三日夜上海東別院にて）²¹⁾

渡邊海旭宛書簡としての同記事において、上海市内の見物後、当時、同地第一とされたホテル、豊陽館にて夕食をとり、その日は上海東本

願寺別院に宿泊している。稲垣にとつて、上海体験は「蛙井の歎を發」した、といわしめるほどの衝撃であつたようである。

翌朝、同船にて香港にむかうが、金沢医学専門学校の山田氏や文部省給費留学生十名あまりが同船していて、船酔いもなく、快適に航海を続けていたことが記されている。

その後、吉野丸はシンガポール・マレーシア・スリランカ、スエズ運河を通過、フランスのマルセーユに寄港後、最終目的地イギリスに到着している。イギリス着がいつであつたかは定かではないが、当時の旅程だと、神戸―イギリス間は一か月半かからないので、大正一〇年一二月末までに同国に着いたものと推測する。⁽²²⁾

3 オックスフォード大学における研学

稲垣は同一一年四月一八日からオックスフォード大学ラスキン・カレッジに籍を置いたことが、つぎの記事からうかがえる。

去十八日(四月)ラスキン労働大学に席を置いて社会問題中心の講義に興味を持つ様になりました。今二十一日朝来馬塚道氏ロンドンより予を訪はれ終日案内して停車場で別れた計りです。長谷川良信君も近くやつて来るでせう、又愉快な話が出来ると思ふて楽しんでます。⁽²³⁾

稲垣が社会問題などを学んだオックスフォード大学「ラスキン労働大学」、すなわち、ラスキン・カレッジとは、英国人成人教育の一部を

担うレジデンシャルカレッジのなかでも最古の歴史をもち、その設立は一八九九年である。「働く人々が社会変化を達成できるよう教育することを目的」とした長期宿泊型の労働者教育機関という特色をもっていた。⁽²⁴⁾

稲垣が留学した頃は、協同組合や労働組合の影響力が強くなつていた時期でもある。おそらく、このカレッジにおいて社会事業などの講義を受講したのであろう。

さて、昭和九年(一九三四)刊『文芸摩訶衍』第五巻に掲載された稲垣眞我著「不請の友」は、主人公が奈良での講演の帰途、車中で出会つたイギリス人女性記者との束の間の交流を描いた小説である。その主人公は明らかに稲垣で、そこで交わされた会話の渡欧体験は、そのまま稲垣の体験と判断してよい。

その会話のなかで、イギリス人女性が「牛津ではどのカレッジにお関係をお持ちでしたか」という質問に対し、主人公は「マンチエスター・カレッジとラスキン・カレッジが重でした」と答えており、稲垣はラスキン・カレッジとは別に、マンチエスター・カレッジでも学んだことがうかがえる。

マンチエスター・カレッジでは仏敎学を研学したと察するが、このカレッジには、すでに眞野正順が留学していた。『浄土敎報』はそのことを、左のように掲載している。

●眞野正順氏の渡英 宗大出身にて昨年帝大選科を出で、其の後 研学の傍ら教育調査会常務委員として本宗敎学の爲めに革新の

実を示しつゝ、ありし俊才眞野正順氏は愈々七月下旬渡英オックスフォード大学に入り宗教哲学の研鑽をなすと共に広く彼の地の事情を視察し来るべしと云ふ。予定期間は二ヶ年なるが同氏の渡英は半ば一宗代表の意を含まれ居り多年此の種研学の士を欠ける本宗に於て斯かる俊才が此の道を得たるは宗門教学の将来に対し大に曙光を放つものと云うべし。尚董職天光院は同氏洋行中友人万理小路氏が管理に当るべしと。

『浄土教報』大正10年6/3発行⁽²⁷⁾

眞野は大正一〇年七月、宗教哲学・社会事業を研究するために、浄土宗内留学生として渡欧、オックスフォード大学マンチェスター・カレッジで研究に従事し、のちにドイツのベルリン大学に移り、同十二年十月に帰朝した。⁽²⁸⁾

眞野がマンチェスター・カレッジでどのような研究を手がけたかは判然としないが、佐藤密雄は仏教学者カーペンターに師事したのではないかと推察している。⁽²⁹⁾ ドイツにおいては、シユラエルマツへに宗教哲学を学んだ。

さて、四月二日には、曹洞宗の来馬琢道がロンドンより稲垣を訪ねているが、オックスフォードに落ち着くまでの足取り、つまり、稲垣のイギリス到着から三カ月間の動静は定かではない。ただし、三月に、

目下眞野君は休暇中で旅行されて居ますが先月末立花俊道氏が英

国を去るに望み、三人相携へてリス、デキツを訊ねました。もう本宗二人丈が佛教家として英国に居るばかりです失礼⁽³⁰⁾

と、立花俊道、眞野正順とともに、ロンドン郊外チプステッドに、「リス・ドイツ」を訪ねるなどしているが、この点については後述する。稲生はオックスフォードに滞在中、イギリス国内の各地を訪れ見聞をひろげたことが、前述の「不請の友」から推察される。すなわち、「貴殿は英国の他の地方へもご旅行でしたか」という質問に、

参りました、ケンブリッジ、イーリ、カンタベリ、それからセクスピアの誕生祭の日にストラスフホード、アボンへ、或はヨーク、マンチェスタ、リバプール方面へも行つたことがあります⁽³¹⁾

と、主人公は述べており、このことから、稲垣はケンブリッジのほか、イーリ、カンタベリ、ストラトフォード・アボン・エイボン、ヨーク、マンチェスター、リバプールと、イングランド東部から南東、そして北東部の各都市を訪れたと考えられる。

その時期については判然としないが、「セクスピアの誕生祭の日にストラスフホード、アボン」を訪れたことから、シェイクスピアの故郷であるストラトフォード・アボン・エイボンへは、その誕生祭が開催される、四月二三日の前後週に訪問したことは確かであろう。とすると、渡英まもなくから各地を訪れたとも推測でき、イギリスに到着し、オックスフォード大学ラスキン・カレッジに籍を置く前後に、

イングランドの各都市を巡ったのではないか。

「不請の友」に、イギリス人女性の、

妾も貴殿のやうに歐洲を巡りましたが牛津のやうな静かな美しい所は見たことはありません。貴殿はさうお思ひになりませんか。⁽³²⁾

といった問いに、主人公は、

勿論です私も日本以外の国々の中で一番さういふ印象の深い所は牛津でした。私は倫敦で大英博物館によく通ひまして、ゼネラル、オリエンタルの両室にお世話になつたものですが、色々の意味で、⁽³³⁾実に素晴らしいものですね、

と答えており、稲垣は大英博物館によく通つたことがうかがえる。後述するが、稲垣はロンドンにも下宿しており、その際、大英博物館に通つたのではないか。

また、「妾はクエーカー宗の信者です。貴殿は倫敦に在るクエーカー大学をご存じですか」という問いかけに、「一度参観したゞけですが私の親友××大学教授がそこへ留学してゐたことがあるので非常に懐しい大学です」とかえすなどして、ロンドンにあるクエーカー系の学校を訪問したことが推測される。⁽³⁵⁾

このように、稲垣のイギリスにおける研学は、稲垣真美の指摘にあるように、

何よりも父はオックスフォード(ラスキン・カレッジ)などで学び、恩師の矢吹慶輝博士が彼の地におられたお蔭で、ブリティッシュ・ミュージアムでの研究や、キリスト教の社会事業活動のあり方などを実地に学び得た。⁽³⁶⁾

と、オックスフォード大学マンチェスター・カレッジ、ラスキン・カレッジ、大英博物館を核に、仏教学やキリスト教系の社会事業について学び、同時に、ヨーロッパ各地を訪れては見聞を広めたのである。

4 欧州諸国訪問とその旅程

稲垣は同年六月中にオックスフォードからロンドンに移動、ヨーロッパ各地を訪問する旅行にでた。

小説「不請の友」でも、イギリス人女性が「欧羅巴諸国へは……？」⁽³⁷⁾と主人公に尋ねると、前述したように、「巡遊しましたとも、佛、伊、瑞、独、白、和から亜米利加廻りで帰国しました」と、イギリス留学から、フランス・イタリア・スイス・ドイツ・ベルギー・オランダ、アメリカ経由で帰国したと述べている。

この点、稲垣の米寿記念に刊行された『筆あそび』所収の年譜においても「帰路に仏、伊、瑞、独、米国各地を視察」とあることと合致する。⁽³⁹⁾ただ、『浄土教報』の記事をみると、若干、異なる点もあり、同資料を用いて、具体的に論じていきたい。

大正十一年(一九二二)八月二五日付『浄土教報』に、

△消息▽

▼稲垣眞我氏（ロオマより）『去月已来パリを経て当地に参り候。ゼノアより当地に、当地より、ナポリ、ミロオレンス、フラノ等を訪ひゼネバ湖畔より伯林に向ひ可申候。法王宮やロオマ古城の跡、甚だ人生幾変転の感慨をそゝるのみに候。人間味か、動物味か、南欧の美は管見のみによるべからずと存候。気温九十六度、⁽⁴⁰⁾黄塵万丈のロオマに七月十五日』。

とあり、同じく九月一日付同紙記事に、

▼稲垣眞我氏（ゼネバより）『七月末伊太利めぐりを終りロンバルチャ平原のアルプストンネルを越へて瑞国ゼネバ湖畔に來り候。倫敦を發してヘルダンの戦跡に近代史を巴里に仏蘭西革命史を而して流行政を更に南欧の美術史ロオマ、ギリシアの古代發達史をミラノにゾオモを訪ひ幸バチカノ法王を路上に見、今此地にカルヒン、ノックス旧宗教革命史を國際連盟事務所を訪ひ、世界の平和事業史に止めをさし、明朝ベルンを経て、フランクフルク、伯林といふ予定の出發可致候』(七月二十六日)⁽⁴¹⁾

とあることから、稲垣はオックスフォードからロンドンに移動、同地を出發し、フランスのベルダン戦跡を見学のあと、パリに移り、七月一五日にはイタリア・ローマにはいつて、ナポリ・フェレンツェ・ミラノと、イタリア各地を訪ねたことがわかる。

七月二六日にはロンバルディア平原を越えて、スイスはジュネーブに到着している。翌日にはスイスのベルンに移つて、ドイツ国内にはいり、フランクフルトを経由して、最終目的地のベルリンを目指す予定としている。

この旅程通りであつたかは詳らかにできないが、

▽動靜△

◎稲垣眞我氏 久しく御無音しました。其の後小生大陸一めぐりをして、目下当地滞在中です。改造の難局に立てる独逸は目下賠償金の問題で、食ふや食はずの憂目を見てゐます、人生の絶望を叫んで一方には、中産階級以下自殺者も多くなり、宗教の中で未來を、憧憬してゐるものも多い者有様です。何れ九月には英国の牛津へ歸つて予定の方針を實行するつもりです。(伯林より)⁽⁴²⁾

とあるように、同年九月八日付『浄土教報』に、ベルンからの消息報告の記事が掲載されている。

同紙をみると、ヨーロッパからの消息などは、おおよそ、一か月遅れで記事が掲載されることが多いこと、また、同記事に「九月には英国の牛津へ歸つて予定の方針を實行する」とあることを勘案すると、稲垣は八月にはベルリンにはいり、同月いっぱい、当地に滞在したと考えられる。

同地での見聞は第一次世界大戦後のドイツの国内情勢に関して、ドイツ国内は賠償金問題からインフレが社会問題となつており、「中産階

級以下自殺者も多くなり、宗教の中で未来を、憧憬してゐるものも多い」と社会事業などとの関連から分析を報告している。

その後、ベルリン滞在後はイギリス・オックスフォードに帰り、考えている何かしらの方針を実行することを予定しているようであったが、

◎稲垣眞我氏(ヲックフォードから) 名物の霧が顔を見せかけ十月二十八九日は初雪が降りました先生御左右申上ます不思議にも芝中に居られた小林文学士と同じ宿に居ります、二人して先生を思ひ出して居ます。御陰で二人とも健康であります(十一月一日)⁴³

という記事から、少なくとも、九月すぎには予定通り、ベルリンを発ち、遅くとも、十月下旬までにイギリス・オックスフォードへ帰ったことがうかがえる。

Ⅲ 留学先での人的交流と成果

1 仏教研究者たちとの交流

同地では小林某氏と下宿を同じくし、一二月末までにはロンドンに移ったが、つぎの記事より、同地において、矢吹慶輝と下宿していたことが判明する。

▽矢吹慶輝氏(ロンドンより) 謹啓千九百二十二年極月最終日に

遙にロンドンより老兄の御健勝を賀し奉り候

稲垣氏オックスフォード大学よりロンドンに來られ小生の仮寓に同宿到居られ候、長谷川眞野両氏より健在の報に接し候リスデビツツ博士の長逝学界の痛恨事に有之候何れ其中吊間に博士夫人を訪ぬる心算に有之候博士に關する二十八日のタイムスよりの抄訳別記稲垣氏の筆に譲り申候 敬具⁴⁴

稲垣はこの下宿にて、前述したパリ語経典などの權威であった仏教学・宗教学のリス・デイビス逝去のタイムス紙記事に接し、追悼の意味も込めて、『浄土教報』に、その抄訳を寄稿している。

のちに、このおりのことを、

あたかも一九二二年の大正十一年の三月雪降る中を眞野正順君と私は、後にパリ文典を鶏声堂から出版された立花俊道氏の東道で、ロンドン郊外の小丘チプステッドの翁の邸宅「那爛陀」の家の老教授と夫人カロリン女史を訪ね、家の中央に安置されたセイロン到来の大理石釈尊座像の前で、終日暖炉を囲んで提撕優遇を頂いた思い出がある。

しかるにその年の十二月二十八日のロンドンタイムス朝刊紙は、昨二十七日七十九歳の長逝を報じ白髪瘦身の写真入りの哀悼記事を読んだのである。当時私は矢吹慶輝、宇野円空両博士とともにロンドンのメーダベルの下宿にいて、その夜は三人で翁の面影や業績を偲んで感慨深く物語ったものであった。⁴⁵

と、回想している。

稲垣らが下宿していた「メーダベル」とは、西ロンドンの住宅街 Maida Vale の一角で、南端付近で三つの運河が交差することから「リトル・ベニス」の愛称をもつ、閑静な住宅街である。

記事を見ると、かつて、稲垣は眞野正順らと同氏宅を訪問、歓待されたことがあり、矢吹・宇野と「翁の面影や業績を偲んで感慨深く物語った」というのである。

ここで名前をあげられている宇野圓空とは、言うまでもなく、日本における宗教民族学の先駆者⁽⁴⁶⁾で、当時、欧州に留学していた。宇野は大正九年一〇月、日本郵船三島丸にて神戸港を出発、京都帝国大学文学部史学科の西田直二郎、仏教大学（のちの龍谷大学）の赤松智城とともに欧州留学を果たした⁽⁴⁷⁾。

船旅では三人同室で、西田は「三人が一所でワキワキとやっつゝるので船の中は無茶無茶で」⁽⁴⁸⁾あったが、一方で「お陰で長い無聊な航海中、神経衰弱にもならず無事」⁽⁴⁹⁾に過ごすことができた、妻への手紙に記している。

西田はイギリスへ、赤松はドイツに、宇野はフランスと、それぞれ各国に留学した。宇野はのちにドイツ・オランダ各国に滞在したことがわかつている。⁽⁵⁰⁾ただし、宇野自身、留学の詳細を書き残したり、あるいは語り残していないため、どのような留學生生活を送ったかは、はっきりしていない。⁽⁵¹⁾当初の留学先であるパリにおいて、すでに日本国内で面識をもっていたフランスの民族学者でディルケム学派の巨頭、レイ・ブリュールと同地で再会していることは、『季刊 民族学研究』に

寄せているとおりである。⁽⁵²⁾

稲垣の回想は、宇野がロンドンの同地に下宿し、矢吹や稲垣と交流をもっていたことを示し、宇野の留学を明らかにするうえで注目できるものといえる。

宇野は「大正十二年の春帰朝の直前に数日パリに出」⁽⁵³⁾てレイ・ブリュール宅を訪れているが、稲垣は五月には帰国の途につくので、同宿は同一一年暮れから同一二年五月あたりまでであろう。

では、宇野が矢吹慶輝、そして稲垣が Maida Vale に下宿していたのは、どういう事情からであろうか。この点、詳らかにできる史料は見当たらない。宇野と稲垣は渡欧前から面識があったかは定かではないが、宇野と矢吹は大正四年（一九一五）五月、宗教学研究会設立メンバーであったことから、以前より面識があった。矢吹を媒介とした人的・知的交流が、ロンドンの Maida Vale で育まれていた、といえるようか。

さて、上述した稲垣・立花俊道・眞野正順がロンドン郊外に住いたリス・デビスを訪ねたのは、大正十一年三月のことである。その九ヶ月後に同氏は亡くなり、ロンドン・タイムス紙上、追悼記事が掲載されるが、その抄訳を含め、同氏訪問の際の回想を、稲垣は「海外鴻信 リス・デビッツ 博士の長逝 英国ロンドンにて」と題し、『浄土教報』に寄稿している。長文となるが、紹介したい。

海外鴻信 リス・デビッツ

博士の長逝

英国ロンドンにて 稲垣眞我

千九百二十二年十二月二十六日の朝、新聞タイムス紙を読んで居ると、英国東洋学者で日本の仏教徒に親縁のある博士リス・デビツ翁の長逝が記してあつた、同宿の矢吹慶輝氏と共に驚いてその記事を読んだ、十二月二十七日遂に老博士は長逝せられた、日本の仏教徒に早く知らせたい、尚ほ在英佛教徒は同氏未亡人カロリン夫人を訪ねて弔意を表したいなど、話したことである、私は先づタイム紙の記事を抄訳して見やう。

英国に於けるバリー語仏典の一大權威として長年東洋研究に数多の貢献をせられたリス・デビツ博士は十二月二十七日七十九歳の高齡を以つてサーレ、チツブステッドの自宅でハーゼ教授の許にギリシア語を学びステンツラー博士の許でサンスクリットを研究し後千八百六十六年頃より佛敎研究に指を染め八年間セイロンに止り英本国に帰来英国学界の指導者となり、千八百八十二より千九百十二年迄倫敦大学のバリー語並に佛敎文学の教授であつた、又千九百四年より同十五年迄マンチエスター大学の比較宗敎学の教授であつた。千八百八十五年より千九百四年迄英国王立亜細亜協会の理事並に図書館長であつて、日本仏教徒の最も知れるバリー、テキスト、ソサイチーは実に同博士の創立になりしものである同博士の遺著多し云々。午後二時頃の列車であつたと覚えて居る、途中ブレリーで汽車を乗り換えてチブステッド駅に下車した、四五〇ある小高い丘を横切つて老博士の自宅の門をたゝいたら直ぐに、カロリン夫人が出

て来て博士の書齋に案内してお互いに英国の礼式で挨拶した、即ちいふまでもなく相互に握手したのである、立花氏は既に何回も訪問をしたところがあるさうで心安い話が続いた、私共も紹介せられて其会話の中の人となつた、話題はバリー經典の研究について上下されて居たが、その内に茶の時間となつ□お茶を飲みお菓子をつまみながら或は煙草をふかしながら話は続いて居たが、白髮の博士の非常に弱つて居られることが氣になつてたまらなかつた。實際十ヶ月前に既に自室内の歩行さへも出来ない程であつたしかし書齋内の書目を見たり、仏像ばかりが沢山に飾つてあるのを見ると、一層老博士の威嚴が尊く思はれた。

たゝ老博士の机の上に飾られてあつた飛行機上の一勇士の姿は私には何のことが解らなかつたが、再会を勧められながら老博士の宅を辞して途中立花氏からあの勇士こそは博士の最愛の一子であるが、世界大戦に出征して飛行機上に戦死をしたのだあの写真の由来を当て某日日本仏教徒が尋ねた時に老博士は声涙共にに降つたこともあるといふことである。

他に二人の娘さんもあるが、一人息子の戦死以来一層翁をして弱らせたのは氣の毒に堪えぬなど、話しながら、夕暮れの一層暗い田舎道を駆へと辿つたのであつた。今その当時の有様を思出して痛恨更に深いものがある、立花氏既に東京駒澤に帰朝せられ、眞野氏伯林に在り予一人英国にあり、恰も大正十一年度の未日に当り感慨を深ふしてこれを記す。

稲垣らが大正一一年三月に訪れたリス・デビズ博士とは、世界的な仏教学者で、パリ語仏教研究の大家であった。一八四三年、イギリスはコルチエスターに生まれ、ブライトンの高等学校卒業後、スリランカに渡り法律上の業務に関わる傍ら、パリ語および仏教研究にいそしみ、一八七六年、イギリスに帰国後、ロンドン大学において、パリ語や仏教文学の講じるとともに、王立アジア協会の書記兼司書となり、東洋学・仏教の発展に尽力した。のちにパリ聖典会を設立したことも大きな業績のひとつである。⁽⁵⁵⁾

仏教の老泰斗を囲んでのひときは、稲垣の記憶に存分に残ったようで、佛教大学の通信教育部報に六回にわたって連載された「仏教を学ぶために」のなかにも、この訪問のことが記されている。⁽⁵⁶⁾

さて、先述したように、稲垣は帰国の際、アメリカ視察を行なった。

▽消息△

□稲垣眞我氏 一昨年十一月欧米宗教事情視察の爲め渡航したる同氏は、オックフォードに六箇月留り、それより佛独居伊その他欧州各国を巡歴し、米國に渡つて、六月十二日シベリア丸にて横濱に帰着した。⁽⁵⁷⁾

婦朝は、大正一二年（一九二三）六月一二日、シベリア丸にて横濱港に到着している。

2 アメリカでの無教会主義との出会い

約二年間の留学は稲垣に何をもちたのであろうか。その研学は仏教学・社会事業であることは、これまで言及したとおりであるが、帰国する際、寄港したアメリカにおいて、キリスト教の無教会主義に出会う。子息の稲垣眞美はこのことを、

父はヨーロッパからの帰途アメリカに立寄って、そこでプロテスタント系の無教会主義のキリスト者集団が、社会的に意義のある実践活動を営んでいるのも自分の目で発見してきた。「アメリカには無教会のキリスト教派が多いんだ」と後年私にも話した。⁽⁵⁸⁾

と、のちに、稲垣が自分に語ったと記しているが、別に、

日本でも、内村鑑三の無教会の運動があり、戦時下もつとも勇気ある抵抗をなし遂げたのも無教会派のキリスト者集団であった。欧米における協会の歴史の深さ、その教権の強大さを思うとき、無教会を貫くことの困難さは、想像に絶するものがある。しかも、無教会であり得たキリスト者のいたことを父は熟知していたはずである。⁽⁵⁹⁾

とも記している。

こういった発言の背景には、

当時父はたしかに在家住まいで、佛専教授として講演に歩いていたが、無寺院主義を通していた。極端な表現でいうと「寺を持たば僧侶は墮落する」との立脚点に拠って理想を実践していたともいえる。⁽⁶⁾

とあるように、寺を持たぬ僧侶生活という信念をもつなかで、留学からの帰国途上、アメリカで無教会主義の実際に出会い、親和性を強めたのではないか。稲垣の理想はアメリカにあったといえよう。

おわりに

以上、『浄土教報』掲載記事をもとに、稲垣真我のイギリス留学実態について、若干の考察を試みた。

戦前の人文学関係の研究者の留学に関しては、その実態は不明瞭なことが多い。とくに、所属先でどのようなことを、誰に、どういったかたちで学んだか、どのような人々と交流したか、などである。

本稿で中心に考察した稲垣についても、オックスフォード大学マンチェスター・カレッジ、ラスキン・カレッジで仏敎学、社会事業を学んでいるが、学びの体系などは管見のかぎり、判然としなかった。ただし、帰国の際、寄港したアメリカで見聞した無教会主義に大きな親和性を持ち、帰朝後の宗教活動・社会事業活動などに影響が多であったことは確かである。

大学史として、本学教員、とりわけ、第三代学長だけではなく、近

代浄土宗において、多くの宗敎家を育成した稲垣がその信念を固める契機は、子息の稲垣真美氏が言及されているように、アメリカの無教会主義との出会いといってよいのではないか。

また、眞野正順や矢吹慶輝、宇野圓空をはじめとする仏敎学者や宗敎人類学者との交流は、この時代の学知の形成・拡散を考えるうえで重要であろう。とくに、稲垣と宇野がイギリスはロンドンで下宿し交流があったことは、留学の実態が不確かな宇野を考える際に多大な事実確認となる。

最後に、近代浄土宗の学僧にとどまらず、人文学知に修得がどのようになされたのか、このような研究は、個人の評伝の範囲のみで見られるといつてよく、管見の限り、体系的にはいまだ十分にはなされていないように思う。この点を考察するうえで、〈留学〉は大きな考察対象であろう。その際、『浄土教報』は近代浄土宗の動向をさぐる好史料であると同時に、右の課題を克服するうえで、実に多くのことを知らしめてくれる重要な史料と考えられる。

〔注〕

- (1) 小宮豊隆『夏目漱石 中』（岩波文庫 一九八七年）一五四頁。
- (2) 岡村民夫『柳田国男とスイス 渡欧体験と一国民俗学』（森活社、二〇一三年）七頁。
- (3) 鹿島茂『パリの日本人』（中公文庫 二〇一〇年）四頁。
- (4) この問題については、小野田俊蔵「明治時代の仏敎僧が推進した仏敎教育制度の改革」『佛敎大学宗敎文化ミュージアム』『佛敎大学宗敎文化ミュージアム研究紀要』第一二号 二〇一六年

- (5) 『浄土教報』や大橋俊雄『浄土宗仏家人名事典 近代篇』（東洋文化出版 一九八一年）など参照。
- (6) 稲垣真美「わが父・稲垣真我のこと」（『稲垣真我先生遺文・追悼文集 編集委員会』『稲垣真我先生遺文・追悼文集』（稲垣真我先生遺文・追悼文集刊行委員会、一九八九年）四二三頁。
- (7) 同上。
- (8) 真野龍海「列伝 稲垣真我先生」（法然上人鑽仰会『浄土』平成一二年六月号 二〇〇〇年）。
- (9) 浄土宗データベース参照。
- (10) 仏教大学史編纂委員会編『佛敎大学史』（佛敎大学 一九七二年）三三九頁など。
- (11) 本節は特に断らない限り、同右、三三九～三五三頁を参照した。
- (12) 同右、三四九頁。
- (13) 佛敎大学学会『佛敎大学研究紀要』通算第三五号（佛敎大学学会 一九五八年）。
- (14) 『浄土教報』大正一〇年七月二九日掲載記事。
- (15) 『浄土教報』大正一〇年九月一六日掲載記事。
- (16) 前掲注（6）、四二〇～四二二頁。
- (17) 同右。
- (18) 同右、四二二頁。
- (19) 『稲垣真我先生略年譜』（『稲垣真我先生遺文・追悼文集編集委員会』『稲垣真我先生遺文・追悼文集』（稲垣真我先生遺文・追悼文集刊行委員会、一九八九年）四九五頁。
- (20) 稲垣真我著「不請の友」（『文芸摩訶衍』第五卷 一九三四年）。
- (21) 『浄土教報』大正一一年二月三日掲載記事。
- (22) 拙稿「西田直二郎とヨーロッパ留学」（佛敎大学宗敎文化ミュージアム『佛敎大学宗敎文化ミュージアム研究紀要』第五号 二〇〇八年）参照。
- (23) 『浄土教報』大正一一年五月二十六日掲載記事。
- (24) ラスキーン・カレッジについては、Harold Pollins『The History of Ruskin Colleg (Rusukin Colleg:Oxford 1984)』、田村佳子「英国労働者教育に関する一考察ーラスキンカレッジ（労働者のためのレジデンシャル・カレッジ）の歴史と課題」（『広島平和科学』第一五号 一九九二年）、富永貴公「ラスキン・カレッジのカリキュラムおよび試験制度への学生の関与ー1960年代の Affluent Workers 論への対抗的措置ー」（『神戸大学発達科学部研究紀要』第一四号第二号 二〇〇六年）、同「教養教育を通じたエンプロイアビリティの獲得ー英国ラスキン・カレッジの女性学教育を事例としてー」（『労働の場のエンパワメント日本の社会教育第57集』東洋館出版社、二〇一三年）などを参照した。

- (25) 前掲注（20）と同じ。
- (26) 同右。
- (27) 『浄土教報』大正一〇年六月三日掲載記事。なお、真野氏の留学記事については、つぎのようなものがあり、列記しておきたい。

●真野正順氏 八月二日東京出発、翌日京都に於ける関西青年会の送別に出席し四日神戸出帆、渡英の途につけり。
『浄土教報』大正一〇年八月二日発行

●真野正順氏近況 八月五日神戸出帆後、航路恙なく欧州の地に入り、九月十七日マルセイユ着、本月初旬には英本国に入った筈である。

ーやつと欧州に來た。この海港に上陸して触れ得た仏蘭西の一班は私に快ち落着を与へた。道にして過ぎゆく端麗な女人、街を出て爽かなるノートルダム丘上の眺望、私の自動車が駆つて壯麗なる公演に入つた時は、歡喜はその頂に近づいた。僕の心身はこん度の旅を喜んでゐる。安心して呉れ給へーマルセルにてー
『浄土教報』大正一〇年一〇月二八日発行

▲英国の最南端より 真野正順

英国の冬は実につまらんと思ひます。この低ひ空に短ひ日定ては何

も出来ません、冬休になったので少し明るい空が見たいと思つて一人で英国の最南端にきましたが同じ空の支配であることを発見するだけでした。僕は新年もクリスマスもこの淋しい海辺の漁夫の台所で送ります。

（十二月二十日、英国ベガニスより）

『浄土教報』大正一二年二月三日発行

●眞野正順氏（エジンバラより）

ジンバラの駅を出るとそこに美しい溪谷がひらけて、周囲にいあかにみ北国らしいいつかりとした建築がそ、り立ち、遠くには古城が空に浮んでいる。まちははさました谷はよく手が入れられて公園になつてゐる。公園の中心のや、片よつた各所に、高い高雅な塔が立つてゐる。遠く見るとそれはスコツの大理想像だ。ゆつたりと椅子によつたスコツの姿はそのまま、スコツランドの誇りでもあり象徴である。自分は此の実用的な英島にこの詩的な都会を発見した事を実に喜んでゐる。

『浄土教報』大正一一年八月一日発行

▼眞野正順氏（ベルリンより）『弥英国を去りて独に入り申候、当分は一切眼を瞑ちて講学に専心致す所存に候、薄暮カントストラーセをたどり、書店の窓に飾る金字をながね読み得ざる非才を嘆ずる切に候』

（七月二十八日）

『浄土教報』大正一一年九月一日発行

◎眞野正順氏（独逸）昨秋来英国オクスフォード大学に研學中の同氏は、研學の都合により七月下旬独逸ベルリンに移つた。

『浄土教報』大正一一年九月八日発行

□眞野正順氏 独逸内地を旅行民情を視察し詩想を練つてゐると。

『浄土教報』大正一二年七月二十七日発行

▲眞野正順氏 同前十月卅日帰朝。

『浄土教報』大正一二年一〇月一九日発行

●長谷川良信、眞野正順氏帰朝 両氏は在独中故国の不幸を聞き直ちに旅装を調へ西伯利亞鉄道經由にて帰国の途につき、眞野氏は十月廿九日帰京、麹町の親戚に仮寓。長谷川氏は西伯利亞で中耳炎に罹り、奉天病院暫時静養し、引続き京都府立病院に数日を費し三日帰京、マハヤナ学園に於て目下加療静臥中。

『浄土教報』大正一二年一二月一四日発行

(28) 佐藤密雄「眞野先生の思い出」(法然上人鑽仰会『浄土 眞野正順氏追悼特集』昭和三八年三月号 一九五九年)。

(29) 同上。

(30) 『浄土教報』大正一一年五月二六日掲載記事。

(31) 前掲注(20)に同じ。

(32) 同右。

(33) 同右。

(34) 同右。

(35) 同右。当時、ロンドンにクエーカー系の大学は見当たらない。したがつて、ここでいう「クエーカー大学」はクエーカー系の宗教系教育機関だったのでは、と推察する。なお、本学歴史学科の水田大紀氏よりご教示いただいた。

(36) 前掲注(6)、四二二〜四二三頁。

(37) 前掲注(20)に同じ。

(38) 同右。

(39) 稲垣眞我「筆あそび 米寿記念」(稲垣眞我一九七五年)。

(40) 『浄土教報』大正一一年八月二五日掲載記事。

(41) 『浄土教報』大正一一年九月一日掲載記事。

(42) 『浄土教報』大正一一年九月八日掲載記事。

(43) 『浄土教報』大正一一年一二月二五日掲載記事。

- (44) 『浄土教報』大正二二年二月一六日掲載記事。
- (45) 「仏教を学ぶために」(『稲垣真我先生遺文・追悼文集編集委員会』『稲垣真我先生遺文・追悼文集』(稲垣真我先生遺文・追悼文集刊行委員会、一九八九年)三二七～三二八頁)。
- (46) 伊藤幹治「宇野圓空 稲作と信仰」(森鹿三 伊藤幹治『日本民俗文化体系11 内藤湖南 宇野圓空』講談社 一九七八年)。
- (47) 前掲注(22) 参照。
- (48) 大正一〇年二月二日付道子宛西田書簡(西田円我編『しのび草』私家版、一九七六)一〇頁。
- (49) 同上。
- (50) 前掲注(22) 及び菊地暁「赤松智城論ノオト―徳応寺所蔵資料を中心に―」(『人文学報』第九四号、二〇〇七年) 参照のこと。
- (51) 前掲注(46) に同じ。
- (52) 宇野圓空「レキブリユール氏の思出」(『季刊 宗教研究』第一年 第一輯 一九三九年)。
- (53) 同右。
- (52) 前掲注(52) に同じ。
- (54) 『浄土教報』大正二二年二月一六日掲載記事。
- (55) 前掲注(45)、三二九～三三三頁。
- (56) 前掲注(45) に六回分が所載されているが、書誌の内訳は以下のとおりである。
- 第一回 「仏教を学ぶために」(『佛敎大学通信敎育部部報』第三三・三四号 昭和三三年五月)
- 第二回 「仏教を学ぶために」(『スクーリングの葉』昭和三三年度 昭和三三年六月)
- 第三回 「仏教を学ぶために」(『佛敎大学通信敎育部部報』第三五号 昭和三三年八月)
- 第四回 「仏教を学ぶために」(『佛敎大学通信敎育部部報』第三六号 昭和三三年十月)
- 第五回 「仏教を学ぶために」(『佛敎大学通信敎育部部報』第三七号

- 昭和三三年十二月)
- 第六回 「仏教を学ぶために」(『佛敎大学通信敎育部部報』第三八号 昭和三四年二月)
- (57) 『浄土教報』大正二二年六月二九日掲載記事。
- (58) 前掲注(6)、四二四頁。
- (59) 同右。
- (60) 同右。

〔付記〕

本小論は、本学国際交流センター機関紙『友好の輪』第二九号に寄稿を予定していた拙稿「学長先生の海外留学」を、大幅に加筆修正したものである。

紙面のリニューアルによって掲載がかなわなかったが、この小文をもって、かつて務めた同センター部門担当の責にかえたい。

(さいとう としひこ) 歴史文化学科
二〇一九年十一月十四日受理